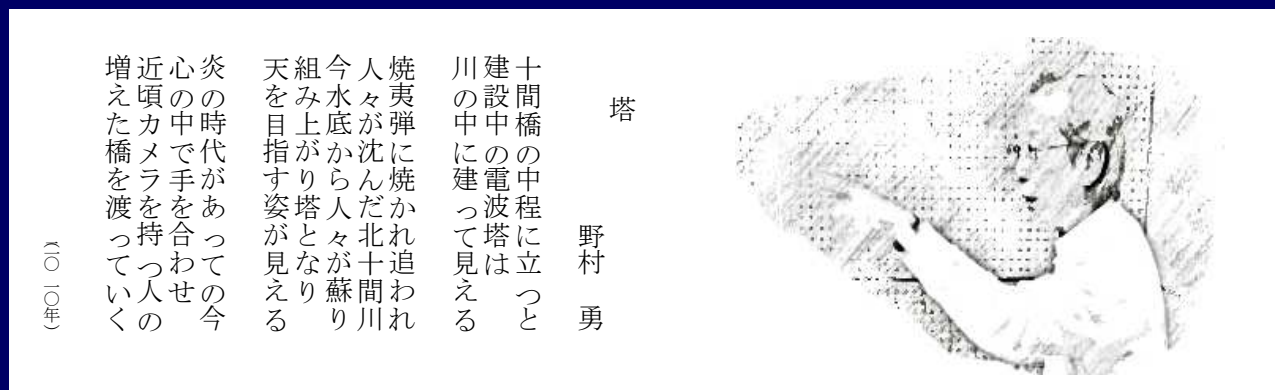


●上演記録

第一次劇団こむし・こむさ

- 第1回公演 1968年9月8日 三島由紀夫作「邯鄲」 演出 野村勇
- 第2回公演 1969年8月31日 榊原政常作「予告された心中」 演出 野村勇
- 第3回公演 1970年8月30日 宮本研作「はだしの青春」 演出 利根川澄子
- 第4回公演 1971年7月31日・8月1日

八木柗一郎作「この小児」 演出 久松健司
野村勇作「天皇陛下のお引越し」 演出 奥住光利



第二次劇団こむし・こむさ

- 第1回公演 2014年10月28日 「右から三つ目のベンチ」
- 第2回公演 2015年11月10日 「たった二軒の回覧板」
- 第3回公演 2016年11月1日・2日 「啄木の蒼き影法師」

※ 3作品ともに 作・演出 野村勇
※ 会場は全て 日暮里d-倉庫をお借りしました。

●劇団こむし・こむさのメンバーを募集しています

キャストとして、スタッフとして、協力者として、参加して下さる方を募集しています。
年齢・演劇の経験は問いません。興味・関心のある方なら、どなたでも。
ぜひ、あなたのご参加をお待ちしています。一緒にお芝居を作りましょう！

お問い合わせは、下の劇団の連絡先までお願いします。

劇団の連絡先 ☎090-6043-8303(久松)
メール nomura1949@gmail.com (野村)
劇団のホームページ 劇団こむし・こむさの部屋
<http://www.ichikiyo.com/komushi.htm>
劇団代表・野村勇のブログ こむし・こむさの日々
<http://komushikomusa.jugem.jp/>

作・演出
野村 勇



シアターXカイ提携公演
劇団こむし・こむさ

第4回公演

水の中の塔

ー東京スカイツリー異聞ー

2017年
11月21日

昼の回 14:00
夜の回 18:30

スタッフ

音響	市来	邦比古
照明	安達	直美
照明協力	針谷	あゆみ
プロジェクター		
操作	陶山	嘉代
装置	野村	勇
	*	
協力	久松	健司
	飯島	正明
	荻野	谷正博
	渡辺	正道
	鈴木	純子
	佐田	マサ子

ほかにも沢山の方々にご協力をいただきました。
ありがとうございました。

キャスト

〈水底の人〉

三上千代	今野 好江
三上きみ糸(千代の母)	莊司あや子
仲山周平(周一の父)	内山 浩和

〈現(うつつ)の人〉

仲山周一	市川 清文
仲山アキ(周一の母)	青木 一代(2役)
仲山亮子(周一の妻)	
観光客	中林 ひとみ(2役)
中学校の校長	
素人カメラマン	
養護施設の園長	野村 勇(2役)

■作・演出より 野村 勇

地面の下の人

本日は皆様お越しくささいまして、心より感謝申し上げます。

えっちらおっちらとやってきて第4回公演とあいなりました。たかが4回公演ぐらいで、過去を振り返るなどお恥ずかしいのですが、第2回公演から毎回、亡くなった人がお芝居に登場していることに気がつきました。

「たった二軒の回覧板」では認知症にかかった人たちの前に、亡くなった夫や母親や妻が姿を現わしました。「啄木の蒼き影法師」は、啄木ゆかりの人物たちが霊となって集合し、劇中劇を演じるという趣向でした。そして今回の「水の中の塔」には、何故か川の底に生き続けている人々が登場します。私は靈魂とかお化けを信じているわけではないのですが、これはいったいどうしたことだろうかと考え込んでしまいました。

思い出したことがあります。天童荒太という作家さんがいます。『静人日記』という作品の中で、こんな風に書いていました。

「そこが都会であろうと、田舎であろうと、歴史をさかのぼれば、いま足をのせた地面の下には、掘り起こされないままの死体があると言っても過言ではないだろう。人はそれを考えないようにして、生活している。泥を踏み越えないと、多くの人々が埋まっている場所へ近づけないように、足の下での死者を意識しないようにしなければ、生活していけない。

ことさら足の下での死者を想うのは、偽善的かもしれない。しかし偽善を意識しながら、やはりせざるを得ない(略)」

地面の下の人たちがいたから、私たちが今ここに、こうしています。その私たちが地面の下を思うとき、そこに地面の下の人々の姿が見えてきます。

ということは、亡くなった人々は、私たちの中で生き続けているということになりそうです。だから、ひょいひょいとお芝居の中に、亡くなった人々がまるで生きているみたいに現れるのだろう、と納得した次第です。

■出演者より “第4回公演に向けて”

市川 清文 (仲山周一)

ちょうど50年前、都立墨田川高校に入学したばかりの私は、誘われて、学校近くの区民館で開かれた東京大空襲を語る会に参加していた。若かりし頃の作家早乙女勝元さんが講師だった。その若さに似合わず、戦争を、個々の人間レベルで直ぐそこにあったこととして熱く説いた語り口が、強い印象として残った。

芝居は、これまでの舞台とはまたひと味違う設定で、その東京大空襲に迫る。私たちの古里で起きたこと。見方を変えれば、それは自分探しのひとつなのかもしれない。

今野 好江 (三上千代)

千代さんを演ることになった時に、父の上の姉のことが思い浮かびました。父には二人の姉がいました。父は11才で母親を亡くし、14才で父親を亡くしました。上の姉は昭和20年6月に39才で亡くなりました。

芝居の中での母親の名前が[きみゑ]、私の実の母親の名前も[きみえ]、そして、私の役の名前は[千代]、父の母親の名前も[千代]。……たくさんの人の「思い」を胸に、時空を超えて飛びます。

内山 浩和 (仲山周平)

私にとって45年ぶりの舞台。しかも高校演劇部時代の同期、先輩に囲まれて、こんなうれしいことはありません。歳を経て、成長した自分に出会えたことに素直に喜びを感じます。演劇はもう一人の自分になれる時間です。浮世を離れ、別次元に生きられる幸せを感じます。

オリジナル脚本抜きにはこの劇団を語れません。本公演では、東京大空襲をテーマに作られました。戦争体験者が少なくなった現在、次世代の人に歴史を伝えることはとても大切だと思います。

荘司 あや子 (三上きみゑ)

とうとう4回公演まで来てしまいました。毎回今回が最後と思いながらここまで来ました。東京大空襲、いや東京だけでなく日本中が標的となり無差別攻撃を受けました。改めて、もっともっと知らなくてはいけない、忘れてはいけないと思いました。

青木 一代 (仲山アキ/仲山亮子)

東京大空襲。私の中では、歴史の一部という程度でした。しかし稽古が進むにつれてシリア空爆・戦争映画などに反応するようになりました。また、戦争での約束事がある事も知りました。それを踏まえると、この「東京大空襲」、民間人の住宅にも構わず空爆する行為がかなり卑劣なのわかります。戦争は何ももたらさない。しかし、人は絶望の中に希望を見出すことができる。「希望」をもって舞台に臨みます！

中林 ひとみ (観光客/中学校の校長)

2014年復活公演から毎年「こむし・こむさ」の公演を観るのを楽しみにしていました。まさか、その舞台に自分が立つことになるとは…。

亡き祖母、亡き母が私に話してくれた「東京大空襲」のこと。自らも母となった今、私は子供たちに『何をわたせるのか』。そんな風に考えながら、稽古をしてきました。今日観に来て下さった皆さまにも、ほんの少しでも、何かを『わたせる』とよいのですが。

■照明家より 安達 直美

こむし・こむささんの公演に参加させていただくのは、三回目となりました。今年は、会場が変わり、心機一転、いつもと違ったこむし・こむささんが見られるのではと思います。いつも以上に、気合いを入れて、取り組ませていただきます。

■音響家(市来 邦比古)の紹介

1970年代、小劇場演劇の黎明期にフリーの音響家として様々な劇団・演出家と共同作業を行い、1976年、劇団第七病棟創立に参加。1969年から現在まで、プランナーとしてクレジットされた作品は500作品以上。世田谷パブリックシアターをはじめとして、北九州芸術劇場、まつもと市民芸術館など多くの音響設備設計に関わってきた。尚美学園大学などの非常勤講師もつとめる。ごく最近の作品としては、渋谷・コクーン歌舞伎第十五弾「四谷怪談」(串田和美演出・美術)、二兎社公演「ザ・空気」(作・演出 永井愛)、シアターコクーン「24番地の桜の園」(串田和美演出・脚色・美術)などがある。

<登場人物の関係>

仲山周平(空襲で死亡)——仲山アキ(敗戦後、周一を出産ののち病死)

仲山周一(敗戦の年に生まれる)——仲山亮子

三上きみゑ(空襲で死亡)

三上千代(きみゑの娘・空襲で死亡)